遥かなり神々の座

谷甲州

早川書房

著者略歴　1951年生，1973年大阪工業大学土木工学科卒，作家　著書『惑星ＣＢ－８越冬隊』『カリスト―開戦前夜―』『火星鉄道一九』『エリヌス―戒厳令―』『巡洋艦サラマンダー』『終わりなき索敵』（以上早川書房刊）他多数

遥かなり神々の座

〈JA505〉

一九九五年四月十日　印刷
一九九五年四月十五日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　谷甲州
発行者　早川浩
印刷者　矢部一憲
発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号　一〇一
電話　〇三―三二五二―三一一一（大代表）
振替　〇〇一六〇―三―四七七九九

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社　製本・大口製本印刷株式会社
© 1990 Koushū Tani　Printed and bound in Japan
ISBN4-15-030505-6 C0193

ハヤカワ文庫JA
〈JA505〉

遙かなり神々の座

谷　甲州

早川書房
365I

目次

1 赤い霧……一三
2 氷の道……二八
3 君子……四三
4 事務所（ルーム）……六四
5 遠征計画……八二
6 摩耶……九六
7 カトマンドゥ……一一七
8 キャラバン……一三六
9 攻撃部隊……一五六
10 越境……一七二
11 下降……一八六
12 裏切り……二〇七
13 掃討……二二三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

14 逃亡……二三九
15 チベット高原……二五五
16 東京……二七三
17 潜行……二八四
18 君子と摩耶……三〇二
19 戦線……三二三
20 国境地帯……三四四
21 ネパール領……三五七
22 再会……三七〇
23 ニマ・ノルブ……三九二
24 襲撃……四〇七
25 航空部隊……四二九
26 デリー……四四一
解説／井家上隆幸……四四九

〈用語解説〉

クランポン……氷雪上を歩くために登山靴などに装着する爪のついた金具。アイゼン。

カラビナ……ピトン（ハーケン）等とロープ（ザイル）を連結する軽合金製のO型またはD型の環で一部が開閉するようになっている。

アイスアックス……氷を砕いたり、削るなどして氷雪上に足場を刻むためのアックスと氷河などの登降の補助をする杖との一体化したもの。ピッケル。

アイスバイル……ピトン（ハーケン）を打つためのアイスハンマーの柄の末端に石突のついたもの。ピトンを打つ面の反対側が鋭いピック状になっている。

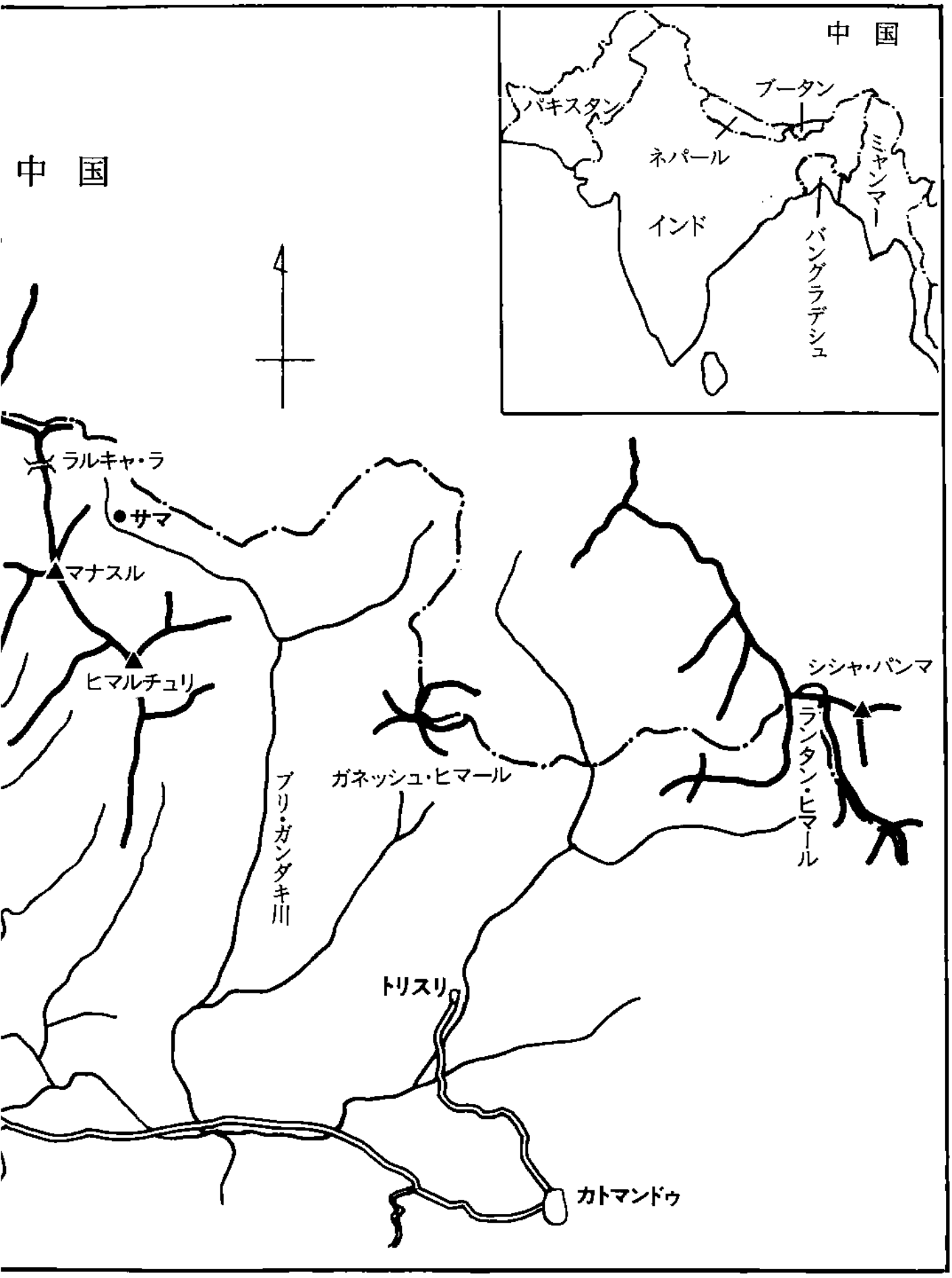
ナッツ……チョックと呼ばれる六角形や楔形の軽合金製の登攀用具の一種で、ピトンを岩壁に打ち込むかわりにクラックにこれをはめこみ登攀の助けにする。工業用ナットを流用していたことからきている。

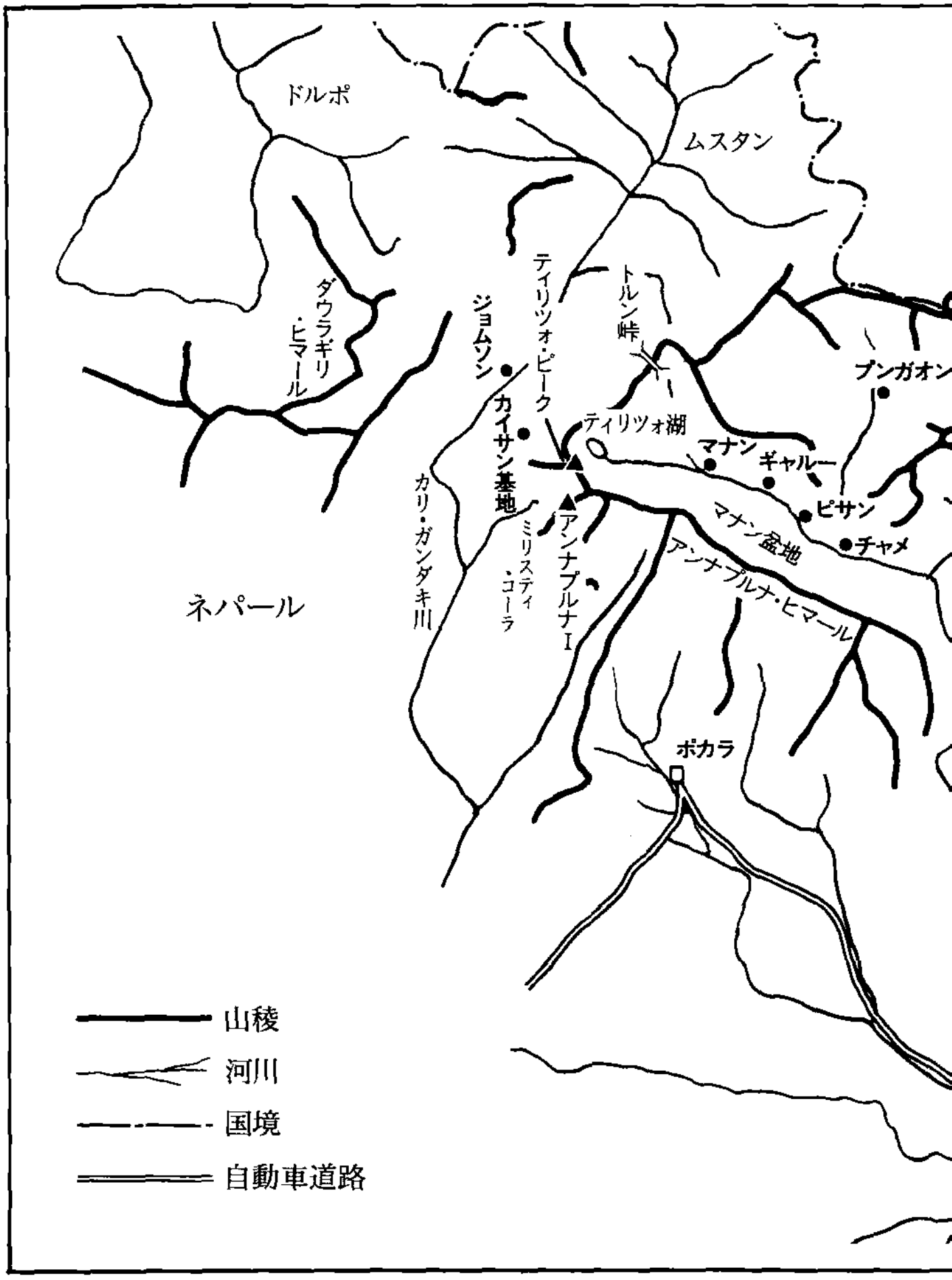
サイドモレーン……側堆積。氷河に落ちこんで下流にはこばれた砂礫や岩屑が、氷河本流の両わきにとりのこされてできた堤防状の堆積。

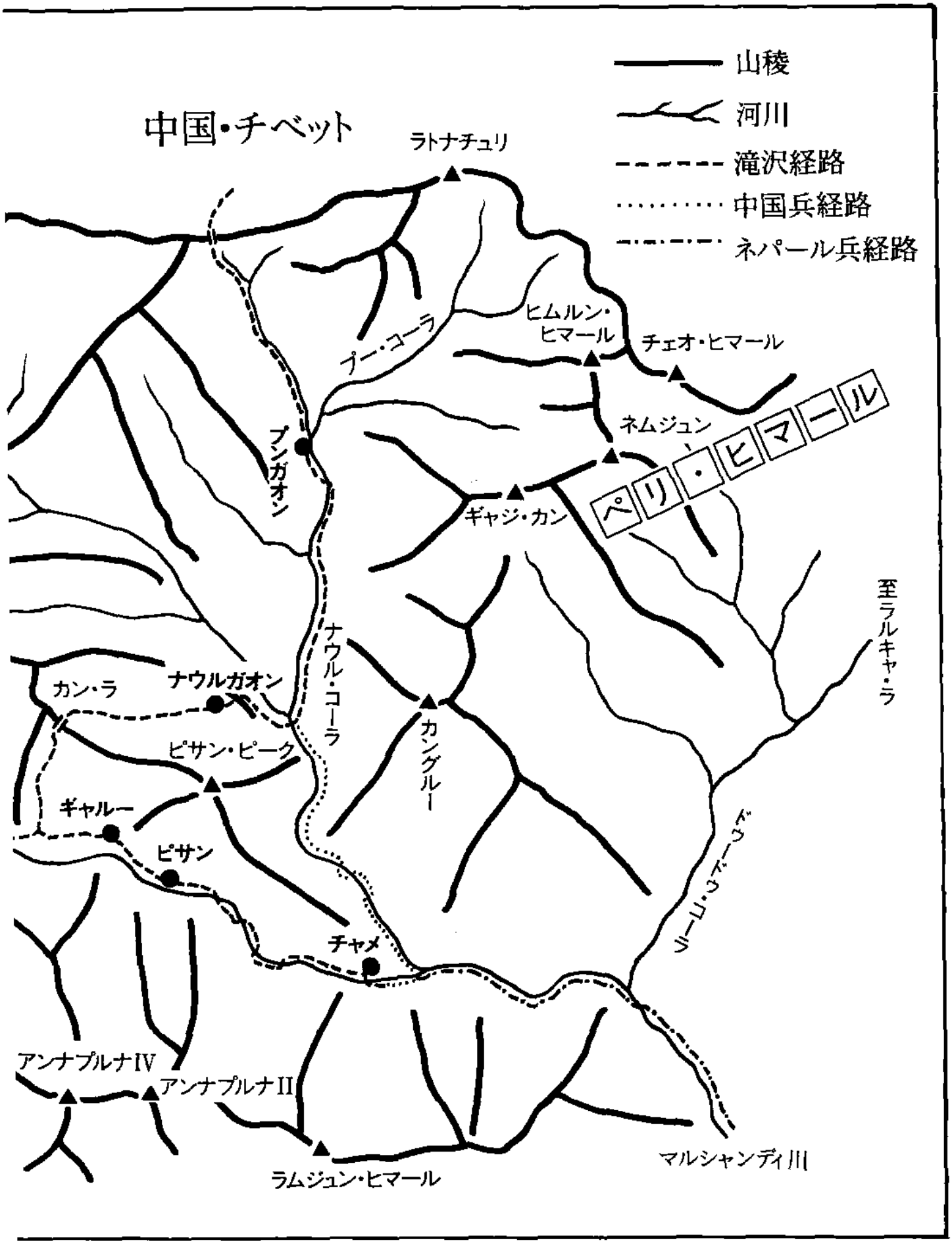
ゴルジュ……両岸が切り立った廊下状の渓谷。喉の意。

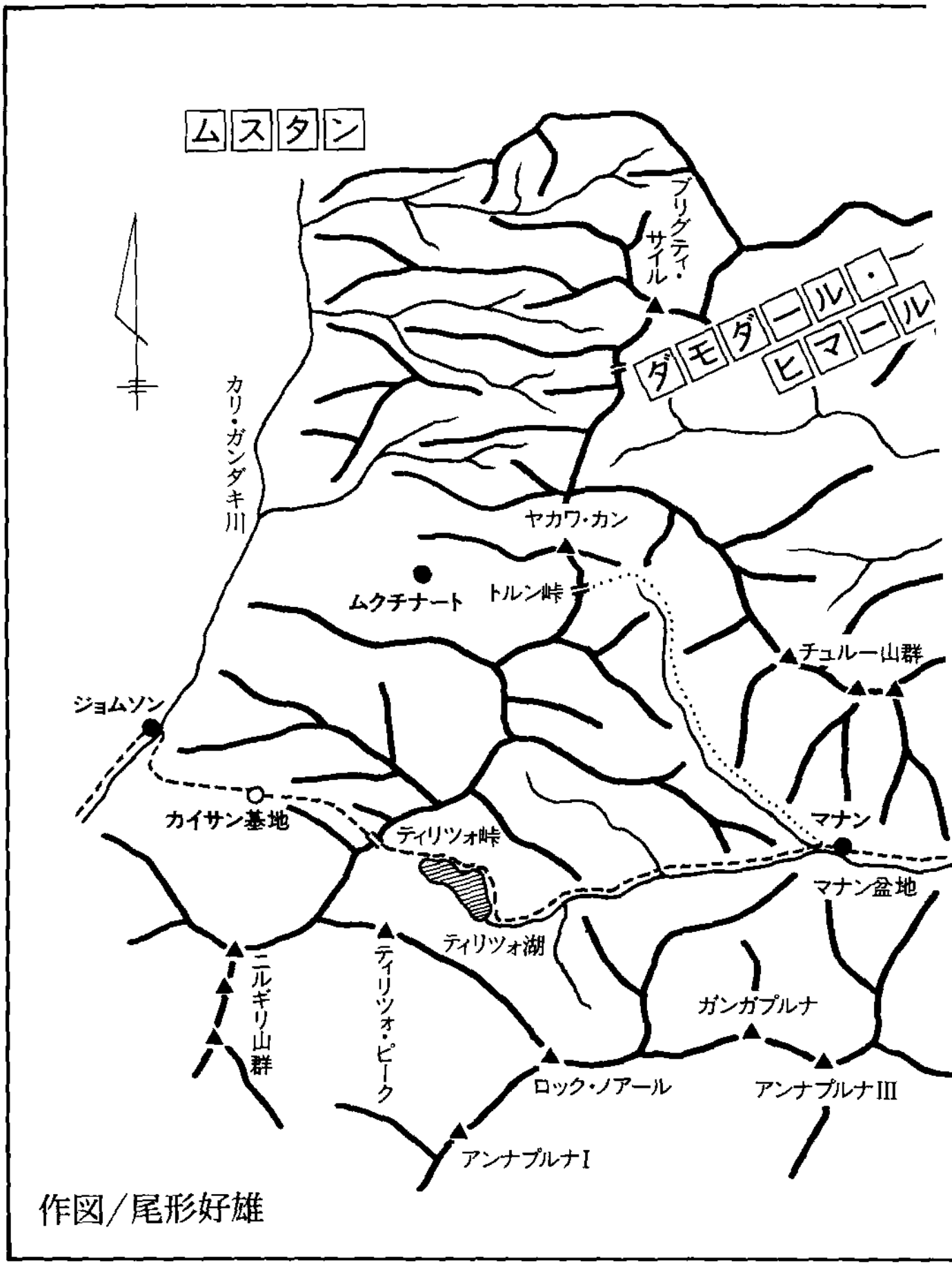
チョータラ……旅人のための休み場。村はずれや街道の道端につくられている。通常は菩提樹のまわりに石組みを積み上げ、背負った荷物を乗せる台と日陰を旅人に提供する。

ダルワ・スルワ……ネパール人男性の正装。前あわせを紐で結ぶ丈のながいシャツと、股引きからなる。正式にはこの上から黒い胴着を着るが、スーツの上着を着ることも多い。


中 国
中 国
パキスタン
ブータン
ネパール
ミャンマー
インド
バングラデシュ
ラルキャ・ラ
サマ
マナスル
ヒマルチュリ
シシャ・パンマ
ランタン・ヒマール
ガネッシュ・ヒマール
ブリ・ガンダキ川
トリスリ
カトマンドゥ


ドルポ
ムスタン
ダウラギリ・ヒマール
ティリツォ・ピーク
トルン峠
ジョムソン
カイサン基地
ティリツォ湖
マナン
ギャルー
ピサン
チャメ
ブンガオン
マナン盆地
アンナプルナ・ヒマール
カリ・ガンダキ川
ミリスティ・コーラ
アンナプルナ I
ネパール
ポカラ
山稜
河川
国境
自動車道路


山稜
河川
滝沢経路
中国兵経路
ネパール兵経路
中国・チベット
ラトナチュリ
ヒムルン・ヒマール
チェオ・ヒマール
プー・コーラ
ネムジュン
ペリ・ヒマール
ブンガオン
ギャジ・カン
至ラルキャ・ラ
ナウル・コーラ
カン・ラ
ナウルガオン
カングルー
ピサン・ピーク
ギャルー
ピサン
チャメ
アンナプルナIV
アンナプルナII
ラムジュン・ヒマール
マルシャンディ川



作図/尾形好雄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

遙かなり神々の座

1 赤い霧

夕暮れがあたりにせまるころになって、雪峰をおおいかくしていた雲が切れた。

滝沢育夫は、手にした双眼鏡を氷河の上部にむけた。そのまま、ゆっくりと視線を移動させていった。氷河にむかって落ちこむ雪壁から下部の緩傾斜帯にかけて、丹念にみていく。この三日間、雲にかくされていた氷河の全貌を、今ははっきりとみわたすことができた。

今日は比較的あたたかく風もなかったが、それでも日なたの氷がとけることはなかった。そしてみじかい日照時間のあと、気温は急速に下降していった。羽毛服をきこんでいても、寒気が骨までしみとおりそうなほどだ。シングルの手袋しかしていないものだから、指先の感覚がたちまち失われていった。

滝沢の手が、かすかにふるえた。視野の中央に、小さな点がみえていた。注意していなければ見失いそうなほど、目だたない点だった。真っ白な氷河の中央付近に、ぽつんとその点はあった。

登攀ルートを確認したときには、気づかなかった点だった。だとすると、あれがそうなのかもしれない。場所からいっても、その可能性はたかい。

――あるとすれば、あのあたりだ。雪壁から氷河上に落下し、そのまま氷河を滑落して、傾斜のゆるくなったあのあたりで軟雪に引っかかったとすれば。

滝沢はそう考えた。そしてさらに、その点を注視した。だが、すでに暗くなりはじめた氷河上で、芥子粒のような点をみわけるのは容易ではなくなっていた。

視界の中を、霧が通過した。滝沢は、辛抱づよく双眼鏡をかまえたままでいた。一度その点をはずしてしまうと、次にみつけるのはずっと困難になる。それを知っていたから、双眼鏡を保持したままその点のみえたあたりを凝視していた。

今のところ、天候が悪化するきざしはなかった。むしろ明日からの数日間は、比較的おだやかな日がつづくだろう。そしてそれは、彼に与えられた最後のチャンスになるはずだ。

数秒後に、視界は回復した。黒い点は、まだそこにあった。まるで滝沢に、発見されるのを待っていたかのように。

滝沢はようやく納得して、双眼鏡をおろした。少なくとも、その場所まで登ってみる価値はある。大候さえ安定していれば、二日くらいで往復できるだろう。雪の状態が、それほど悪くなければだが。

明日からの行動を考えながら、下方のベースキャンプに眼をむけた。彼の立っている大岩のすぐ下に、ベースキャンプは建設してあった。ベースキャンプといっても、小さなものだった。

テントが三張りと、野積みしてシートをかけた隊荷の山があるだけだ。なかば雪にうもれたテントのひとつに、声をかける。

テントのひとつがもぞもぞと動いて、雪焼けで真っ黒になった顔が突き出された。隊の中で、一番若い原田だった。もっとも四人いた隊員のうち、残っているのは彼と滝沢だけだった。一人は三日前に埋葬をすませ、もうひとりは死体さえ発見できていない。彼らのほかには、インド政府から派遣された連絡官（リエゾン・オフィサー）と、ネパール人のキチン・ボーイがいるだけだ。

原田は無言でテントからはいだし、滝沢のところまで登ってきた。いつもは軽口ばかりたたいている原田だったが、さすがにここ数日は元気がない。羽毛服の前をかきあわせ、寒気に顔をしかめている。その顔も、雪焼けの上に軽い凍傷にまでやられているものだから、どす黒く変色していた。右足は、軽いびっこをひいている。

顔を雪峰にむけたまま、滝沢は双眼鏡を差し出した。原田は黙ったまま双眼鏡をかまえ、滝沢の示す方向に焦点をあわせた。しばらくのあいだ一点を凝視したあと、ぽつりといった。

「たぶん、奴でしょう……。場所からしても、まちがいなさそうだ」

それから、滝沢の顔をみていった。

「明日、登りますか？」

滝沢は首をふった。結論は、すでにだしていた。

「ベースの撤収を、のばすわけにはいかん。お前とリエゾンは、予定どおり明日下れ。俺は、あの場所まで登ってくる。たぶん二日くらいで、降りてこれるだろう。急いで追いかければ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com